

いわて児童館 テキスト

vol.2



いわて児童館テキスト
vol.2
平成19年3月発行

協力
岩手県発達障害者支援センター
製作
岩手県立児童館いわて子どもの森
〒028-5134
岩手県一戸町奥中山字西田子 1468-2
TEL. 0195-35-3888
FAX. 0195-35-3889

本文中イラスト：Rie fuji

気になるん？



軽度発達障害って？

はじめに (岩手県立児童館 いわて子どもの森 館長 吉成信夫)…………… 1

I 軽度発達障害についての基本的理解

(岩手県立療育センター 相談支援部 相談支援員 長葎康紀)

1. はじめに…………… 2
 2. 発達障害ってなに?…………… 3
 3. 自閉症とは…………… 3
 4. AD/HDとは…………… 5
 5. さいごに…………… 6

II 軽度発達障害をもつ子どもと児童館・放課後児童クラブ

(明星大学 教授 西本絹子)

1. 基本的な対応のしかた
 (1) 見えない障害を見る目をもつ・「普通」のように見えるなかに弱さがあることを理解する…………… 7
 (2) トラブルのないときにこそ見えない弱さに踏み込んで対応する…………… 11
 (3) 「障害だから」ではなく、ひとりの子どもとして生活環境全体のなかで見る・同じ障害でも子ども一人一人によって対応は異なる…………… 12
 (4) 問題行動は「対応を変えて・もっと変わりたい」というメッセージ…………… 15
 (5) 「悪いところをなくす」ではなく、「良いところをたくさん作る」…………… 16
 2. 集団のなかでの軽度発達障害
 (1) 土台は指導員との信頼関係づくり…………… 18
 (2) 集団全体は安定しているか…………… 19
 (3) 集団のなかでの軽度発達障害児への対応…………… 19

III セルフエスティームと遊び

(岩手県立大学 社会福祉学部准教授 山本克彦)

1. 自分を好きになり、自分を大切に思う気持ち
 ～セルフエスティーム～…………… 23
 2. 子どもたちのセルフエスティームを高めるために
 ～こんな遊び、こんな工夫～
 (1) こんな遊びをしてみよう (1人遊び)…………… 24
 (2) こんな遊びをしてみよう (2人組遊び)…………… 26
 (3) こんな遊びをしてみよう (グループ遊び)…………… 27
 (4) こんな遊びをしてみよう (全員遊び)…………… 28
 コラム① おとなのセルフエスティームを考える…………… 29
 コラム② 自分と違う他の人、他の人と違う自分…………… 30
 あとがき…………… 32

IV 参考データ (相談機関・関連機関等)…………… 33

はじめに

第2号のテーマは「気になる子どもたちへの対応」に取り組もうと実は一年前に私は心の中で決めていました。なぜか。

当館では、児童館や放課後児童クラブ職員、民生児童委員、家庭相談員、子育てサークル、ボランティアなど多様な領域の方々に集まってもらって、本音で語り合う「情報交換会」を県内各地を巡回し開催してきました。その中で、現場スタッフの皆さんから出される悩み、課題の多くが、気になる子どもたちへの対応についてであったからです。

軽度発達障害と呼んでも呼ばなくても、様々なかたちで気になる子どもに関わる現場スタッフは、日常生活の中で抜き差しならないかたちでその場の対応を求められます。現場では迷いながらも、子どもたちに寄り添いながらどうしたらその子の良さが発揮できるかを誠実に探しています。人的支援の手が届きやすい学校とは異なり、児童館や放課後児童クラブでは情報も人的支援もまだまだ充分届いているとは言えません。児童館や放課後児童クラブを舞台にした、つまり遊びや生活保育の中での気になる子どもたちへの対応の考え方を実践的に記したテキスト(ノウハウやあるべき論ではなく)がどうしても今、必要だと思ったのです。

テキスト化することは決めたものの、当館に専門家がいないわけでもなく、内容については暗中模索が続く中で、児童館、放課後児童クラブ等でのコンサルテーションに長い経験を有する西本先生との出会いがあり、他の先生方にも執筆を快諾いただき、ようやくテキストとしてまとめることが出来ました。本当にありがとうございました。また、岩手県発達障害者支援センターの協力にも深く感謝いたします。

本テキストが、どうか現場で日夜、悪戦苦闘されているスタッフの皆様や、今辛い思いをしている子どもたち、そしてご両親の直面している状況の改善と、少しでも多くの方々に軽度発達障害に対する共通の理解を持っていただくことに役立てれば幸いと存じます。

2007年3月

岩手県立児童館 いわて子どもの森 館長 吉成信夫

軽度発達障害についての基本的理解

岩手県立療育センター 相談支援部（岩手県発達障害者支援センター）
相談支援員 長葎康紀

1. はじめに

私たちの社会には様々な方々が暮らしています。男の人、女の人、大人、子ども、赤ちゃん、元気な人、病気の人、疲れている人…。

中には障害がある人もいます。周りの人からは気付かれることが少ない方でも、大変な困難を抱えている方がいらっしゃるかもしれません。

このように、見ただけでは気付かれにくいけれども困難を抱えて、生活している方たちの中に、「発達障害」がある方々もいます。

発達障害がある方の中には、気付かれにくいために、誤解をされていたり、傷つけられたりしてしまう方もいます。また、発達障害の子どもを持つ親御さんには、「子育てが悪いからだ」、「もっとしつづけをしっかりと」と責められたり、また、周囲の他の親御さんとの関係が気まずくなったりすることもあると聞いています。

知的な遅れはないものの、友達との関係が苦手、ルールのある集団遊びが苦手、たくさん話す一方で、相手から言われている内容・意味が分からない、計算は得意なのに文章問題は苦手などの特徴を持つ発達障害の子どもたち。その子たちと関わる時に、一番大切なことは、その子のことを正しく理解し、必要な部分で寄り添ってあげること。そのために、何よりも先ずは発達障害のことを正しく理解してください。



2. 発達障害ってなに？

発達障害とは、医学的には知的障害、脳性まひ、てんかん、聴覚障害なども含まれます。日本の法律では、平成17年4月1日に施行された発達障害者支援法において「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるもの」とされています。

発達障害の中でも高機能自閉症、アスペルガー症候群、注意欠陥・多動性障害（以下AD/HDという）、学習障害（LD）などは「軽度発達障害」と呼ばれることがあります。「軽度」という言葉は、障害の程度や困難さの程度を表すものではなく、知的な遅れがないことを表します。「軽度」の方の中には、たくさんの困難を抱える方が多くいます。知的な遅れがない分、周囲の方から理解が得られにくいことや、本人や家族の方も障害に気がつきにくいことなどがあります。

3. 自閉症とは

日本自閉症協会発行の『自閉症の手引き』によりますと、「現在のところ原因不明の、そしておそらく単一の原因ではない中枢神経系を含む生物学的レベルの障害で、生涯にわたって様々な内容や程度の発達障害をしめします」と書かれています。つまり、親御さんの養育態度や愛情不足などが原因ではないのです。また、環境や対応を工夫することによって社会で生活しやすくなるはありますが、根本的な苦手さは変化や軽減しつつも、継続することが多いと言われています。

自閉症の特徴は、社会性（他人との関わり、ルール）の苦手さとコミュニケーション（会話や意思疎通）の苦手さ、想像力の苦手さ及びそれに基づく行動の苦手さ（こだわり等）が見られることです。また、光や音、臭い、味、体に触れるものなどの感覚に過敏さをもっていたり、目で見て理解することは得意でも、耳で聞いて覚えるのは苦手な人が多いなども特徴として挙げられます。

自閉症の中には知的な遅れもあるもの、知的な遅れがないもの（高機能自閉症）、知的な遅れと言葉の遅れがないもの（アスペルガー症候群）など様々ありますが、それらは別々のものではなく、どれも「自閉症の特徴」が見られ、似たようなグループに属している（ひとつの連続体の中のどこかに属している）という考え方が広まってきています（自閉症スペクトラム）。

自閉症の子どもの場合、幼児期には言葉が遅い、視線が合いにくい、一人で遊んでいることが多い、こだわりが強く、思うように出来ないと泣き騒ぐなどの話が聞かれます。小学校就学後、教師から一斉の指示をされても動かない、注意されても同じことを繰り返す、時間割の変更があると理解できないので、混乱してしまい騒ぐ等の話を聞くことがあります。逆に、習っていない漢字や英単語を覚える、計算が得意、図鑑や地図を見てすぐに記憶できるなどの得意分野を持っている方もいると聞いています。



4. AD/HDとは

NPO法人えじそんくらぶ発行の『ボクたちのサポーターになって!! 1』では「AD/HDは集中力・注意力・衝動性・多動性を自分でコントロールできない脳神経学的な障害です」と書かれています。つまり、おちつきがない、しゃべってばかりいる、忘れ物が多い、順番が待てないなどの行動を、自分では気をつけていても「ついやってしまう」ことがあるのです。

AD/HDは「不注意」、「多動性」、「衝動性」の3つが特徴とされています。AD/HDには、うっかりミス、忘れ物、注意力散漫などが見られやすい「不注意優勢型」、じっとしてられない、気になるものがあるとすぐに動いてしまう、場面をわきまえずにいつまでも話すなどが見られやすい「多動／衝動性優勢型」、両方の特徴が見られる「混合型」などのタイプがあり、混合型が一番多いといわれています。

AD/HDの子どもは、忘れ物や授業中の立ち歩きなどを「わざとやっている」と誤解されることがあります。そして、厳しくしかられたり、何度も繰り返し間違いを直されたり、その結果として、本人が自信を無くしてしまったり、自分を責めてしまったりすることもあります。

一方で、AD/HDの方々の特徴として、目標を見つけるとそれに向かって努力し続ける、発想が豊かで新しいアイデアを考えるなどの力を発揮することもあります。



5. さいごに

発達障害者支援センターでは無料で電話相談に応じています。また、研修会への講師派遣も行っています。

相談の中で「この子は発達障害ですか？」という質問を受けることがあります。これらの質問には、「診断は医師が行いますが、今の段階でも出来ることはありますよ」と答えることが多いです。

「困った子」ではなく、「困っている子」なのです。周囲の方々以上にその子自身が困っているのです。その子の困り感を少しでも減らしてあげることが一番大事であり、そのためには、正しい理解と様々な工夫、そして少しのお手伝い（支援）が最良なのかも知れません。

問合せ先：岩手県立療育センター 相談支援部

（岩手県発達障害者支援センター）

〒020-0401 盛岡市手代森6-10-6 TEL 019-601-2115

参考文献

『ボクたちのサポーターになって!! 1』（NPO法人えじそんくらぶ発行）

『実力を出しきれない子どもたち』（NPO法人えじそんくらぶ発行）

『LD・ADHD・高機能自閉症とは？』（全国LD親の会発行）

『自閉症の手引き』（日本自閉症協会発行）

『わかってほしい！気になる子』（田中康雄監修／学習研究社発行）

『アスペルガー症候群と高機能自閉症の理解とサポート』（杉山登志郎編著／学習研究社発行）

II

軽度発達障害をもつ子どもと児童館・放課後児童クラブ

明星大学 教授 西本絹子

1. 基本的な対応のしかた

ここでは、教科学習や訓練の場ではない、遊びと生活の場である児童クラブで実際にできること・大切なこと・クラブだからこそできることを述べます。即効性のあるノウハウではないので、もどかしく思われるかもしれません。しかし、地道な実践への努力こそが子どもの豊かな発達を実現する近道です。

注：本文中の事例は、複数の事例をミックスしたり内容に支障のない程度に改変したものです。

（1）見えない障害を見る目をもつ・「普通」のように見えるなかに弱さがあることを理解する

軽度発達障害の子どもたちへの対応は、まず、障害に関する基本的な知識を得ることから始まります。障害という枠組みから子どもの弱さをきちんと理解することは、子どもの側に無用で過剰な頑張りを求めることなく、的確な保育の手立てをとることの第一歩です。しかし、知識を保育に生かすには、ひとつ、越えなければならないハードルがあるようです。

そのハードルとは、「見えないものを見ようとする難しさ」「普通のように見える中に弱さを見てとる抵抗感」です。軽い障害とは、知的な遅れは軽いが、本当に困難な部分は見えにくい、と言う意味でもあります。知識として知っていることを、日常生活のなかでの目の前の何気ない姿の理解につなぐことは案外難しいものです。



* 障害から生じる固有の特性が、現実の生活のなかでどんな行動となって現れているのかを見抜く

エピソード1；なんでもよく知っていて手のかからないA君と、ささいなことでパニックになりウソを言うA君

アスペルガー症候群の3年生の男児A君は、学校の成績は悪くなく、恐竜や化石や歴史上の人物などに関する知識はぬきんでており、難しいことをたくさん知っている。一人で黙々と本を読んだりブロックで巧みに「宇宙基地」を作ったりして遊ぶことが多く、ふだんは手がかからない。それなりに好きな子どもたちはいるようで、なんとなく一緒にいることもある。

しかし、A君はささいなことでトラブルになるのが指導員には悩みだった。片付けの時間になって他児がブロックを片付け始めると、身近にある物を投げつけた末に、さめざめと泣いてしまう。うっかり他児の物を壊してしまい相手から一言何か言われると、大泣きしてなかなか立ち直れず、パニックになる。そういうとき指導員が理由を聞くと「イジワルされた」「バカと言われた」などと事実とは異なることを言う。ことばですじみちを立てて諭すと、なんだかんだと“ヘリクツ”をこねて反論するか、もしくは「牢屋に入れられちゃう」「警察に逮捕されちゃう」といった妄想のようなことばを口にし、時にはイライラと自分のほっぺたを叩いてしまう。最後にはA君は「わかりました」と言うのだが、同じようなことが再び起こる。



トラブルの際のA君の姿は、障害名がついていなければ、通常は「わがままで幼く、情緒不安定、困った子、しつけの問題」などと受け止められるでしょう。何でもよく知っている2年生の子どもが、なぜ片付けの時間に繰り返される光景がわからないのか。なぜ暴力的な行為にまで及ぶのか。さらに「ウソ」を言うのか。ちょっとした相手からの注意になぜ過剰に反応するのか、ことばで「わかった」と言ってもなぜ行動が伴わないのかなど、理解しづらいものです。

では「アスペルガー症候群」を知ることで、どのように見方を変えることができるでしょうか（もちろん、実際はそれだけで子どもの姿を解釈できないのですが）。

A君の姿は、障害から来る場の状況認知の悪さ、他者の気持ちや意思を推測することや他者の視点で物事を理解することの苦手さに大きな原因があると推測されます。その場の状況がうまく理解できないので、「イジワルされた」などの被害妄想的なことばや、時には乱暴な行動となって現れるのでしょう。「イジワルされた」というのは作り話でもわがままでもなく、障害から生じる認知の歪みであり、そのようにしか理解できないのです。周囲の世界のわからなさ、入れなさや、A君から見れば理不尽なことに囲まれて1日を過ごし、「イライラ」し、不安が募り、時にはそれを解消するすべもなく自己否定的に自分のほっぺたをたたいたりもするのだらうと思います。さらにその背景には、信頼できる他者（指導員）との関係ができていない、という問題もあります。

しかし、このように解釈をしていくことは、障害に関する基礎知識がありさえすればすぐにできるものでもありません。「社会的相互交渉の障害・他者の心を理解するのが困難」といった抽象的な定義は、今、この場で、たくさんの事情が交錯するなかでの目の前の子どもの行動をストレートに解釈してくれるものではないからです。その結果、どうしても常識的な解釈に引きずられてしまったり、「困った子ども」として見てしまいがちです。



障害から生じる固有の特性を知ること、それが実際の児童館や児童クラブという場において、子どもにどのような行動となって現れているのかを見抜くことは異なることです。障害に関する知識を土台にして、実際の生活のなかで「見えない障害を見る」力量が求められます。

*「普通」のように見えるなかにこそ弱さがあることを理解する

エピソード2；A君の遊びや友だち関係をよく見てみると

A君はブロックでは、なにやら難しいことばで独り言を言いながら見事な物を作るが、他児とやりとりしながら共同で作ったり、ごっこ遊びに展開したりして遊ぶことはない。A君なりに遊びたい女児たちがいるようで、彼女たちが人形の家遊びをしているとき、そばで家具のパーツを出し入れしながらなんとなくその場にいる。彼女たちはA君の動きに合わせて、位置や姿勢を避けるようにずらし「いつも私たちのそばにいて、私たちがいないときはこのコーナーに来ないんだから」と困惑している。「一緒にいる」ように見えて、実のところは嫌がられている。語彙は豊富だが、会話の内容や口調などが現実離れしており、それに合わせることでできる大人とならばやりとりができるものの、子ども同士の会話は長く続かない。

A君のマニアックで高度な知識や豊富な語彙、見事な製作物は、他の子どもたちと交流をする手段になっていないようです。一人で巧みにブロックを作りこむ遊びを続けているのは、共同で活動することの苦手さの裏返しでもあり、結果的に共同活動や集団遊びの経験を奪い、みんなに参加したい気持ちを阻害する形になっていました。そのようにして、対人関係を切り結ぶすべを持たないまま、人との関係を読み誤ってしまうことが重なってきていたのでした。

A君のトラブルの姿の基本的な原因やA君の抱える困難は、実はトラブルを起こさず「普通」のように見えるときのなかにあります。本人の自由な意志で選んだかに見える行動のなかに弱さを見てとること、困らない行動のなかに弱さがあることを理解することはなかなか難しく抵抗感のあるものです。しかし、一見平穏に見える生活のなかで、本当にそれが子どものしたいことなのか、子どもの願いはなんなのか、ていねいに見ていくことが、障害に関する知識を活かす、ということなのです。

(2) トラブルのないときにこそ見えない弱さに踏み込んで対応する

見えない部分での弱さへの配慮は、「トラブルを起こしたとき」ではなく、平穏に見えるときにこそ行いたいものです。その点への配慮なくして「個性を尊重」「特別扱いはしない」「自主性を尊重」という信念を保育に持ち込むと、ややもすれば子どもにとって、集団という荒波の中に放り込み、過酷なことを強いることにもなりかねません。

エピソード3；A君への対応を変えてみたら

A君に対して見方を変えたクラブでは、A君への対応を変えていった。毎日は無理なので、下校の早い2日間だけを、担当を決めてA君に対応するようにした。ありとあらゆることをやってみるうち、A君の好きな女児たちとは「人生ゲーム」ならば指導員の仲介の元に遊べるようになった。指導員は、ことばの使い方や相手との距離の取り方を具体的にその場で教え、相手の反応やその場の状況をさりげなく説明していった。特に担当者が付かない場合も、指導員が折々に、場面の転換や切り替えの際は、あらかじめ予定を知らせるだけでなく、そのときA君の思っているであろうことに沿ってことばをかけ、気持ちを支えるようにした。ブロックの「宇宙基地」製作の際には、A君のどんどんのめりこんでいく独り言に、指導員が根気強く付き合ったりし、気持ちをことばにするように努めた。一緒に作品を作り、デジタルカメラで作品集を作り、展示コーナーを設けた。そうするうち1年生の男児数人と基地を作り、ごっこ遊び的なものが少しかできるようになった。そのようにして、徐々に、A君はクラブのなかで位置づくようになった。1年後にはいつの間にか「〇〇された」という言い方は消えていた。



A君への対応は、パニックを防ぐための直接の対策や社会的スキルを教える訓練的な関わりではありません。指導員がA君の心に寄り添うことに努め、他者と遊べるようにはたらきかけ、それを通じて地道にコミュニケーションの力を育てました。そのことで、マニアックな知識を集めるために使っていたことばが、「気持ち」を乗せて他者に送り、他者のそれを受け取るためのことばへと少しずつ変化していきました。ブロックという一人の世界のこだわりを、指導員がA君の世界を共有するための強力な“武器”として利用し、それを他児たちとの橋渡しにも使い、共同活動へと広げていきました。「何も起こさないときにこそはたらきかける」ことは、軽度発達障害の子どもたちが真に力をはぐんでいくことになるのです。

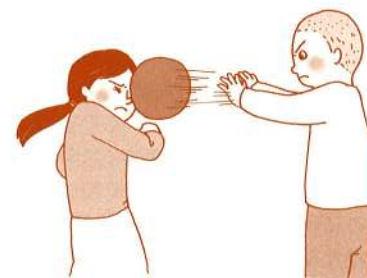
(3)「障害だから」ではなく、ひとりの子どもとして生活環境全体のなかで見る・同じ障害でも子ども一人一人によって対応は異なる

「ADHDだから」「LDだから」という固定的な見方や、「ADHDの子どもには〇〇」といったハウツーや技法を直接的・表面的に使うと、適切な対応はとれません。

障害を持つ子どもは、生物学的な弱さから生じる中枢神経系の障害を抱え、特有の「弱さ」を持っています。しかし、「今・この児童館で見る子どもの姿」は、それ以外の、たくさんの要因から成り立っています。一人一人の生きてきた歴史も異なるし、生活するなかでの「空間・人間関係・時間」のありようも異なります。それらをできるだけ広く理解することから、子どもの次の発達を促すための、有効な保育実践の手立てが見えてきます。

エピソード4；ADHDのB君がまたやった

ADHDの3年生のB君は、衝動性が高く、いきなり石を投げたり他児の遊びを破壊する、集団のルールが守れない、などの問題を毎日噴き出している子どもである。ふだんは低学年の男児たちと室内で大型ブロックで遊ぶことが多いのだが、ある日、児童館の庭で同級生の男児たちがドッジボールをやっており、B君はしばらくそのまわりをなんとなくウロウロして砂などをいじって過ごしていた。ゲームが終了し、次に、2年生の女児たち数人が“めっちゃあて”を始めた。ボールがB君の前に転がってきたところ、B君はそれを拾い「ジャマだー!!」と怒鳴って、50cmほどの至近距離から、思い切り、ボールを拾いにきた女児の顔面に向かってボールをぶつけ、すたすたと向こうへ行ってしまう。あまりのことに女児は何も言えないまま立ちすくんでいたが、他児たちが彼女を連れて指導員のもとへ訴えに行く。その顔を見た指導員が「またB君が！なんてことを！顔を冷やしてもらっておいで」と話しかけると、それまで気丈に我慢していた女児がポロポロ涙を流し始めた。指導員はB君を呼び、「あやまりなさい！」と叱ったが、B君にとっては「昔の話」「なかったこと」とでも言うように「あやまらな一い」と平気で答えている。女児たちの怒りは収まらず、口々に最近のB君の暴挙を言い立てる。指導員も徒労感でいっぱいである。



B君の行いは、衝動性が高く情緒的にこじれてしまったADHDの子どもに見られるような問題行動です。「何らかの外界の刺激を受けるとよく考える以前に手が出てしまう」「行動抑制の障害のために情緒的なコントロールが未熟な状態」と言えます。しかし、「だからそういうことをするんだ」と思ってしまおうと、次の実践につながりようがありません。

B君の行いは、自己中心的ではあるものの、B君なりの思いや文脈があり、3年生という年齢であることや、周囲の子どもたちとのこれまで築いてきた関係、日々の遊び、指導員の対応が関係しているものです。

B君の中には“ドッジボールに入りたい、でも入れない、どうしたら入れるかわからない”という気持ち、同級の男児たちとは対等にできないという自己への気づきや否定的な思いがあると思われます。その背景には、運動遊びに入るための身体的なスキルやコミュニケーションのしかたが身につけていないこと、自分の気持ちを上手に表現できないこと、周囲の子どもたちも、B君を仲間に入れることをもはや避けているらしいということもあるでしょう。さらに、職員の対応が事後に回ることが、B君のなかの心の経緯を理解してもらえず結果だけを否定的に注目されることとなっています。そのため機械的に謝罪を求めても効果がなく、かえって反抗的な態度を助長することになり、それがさらに周囲に「乱暴な子」という評価を重ねていくこととなります。

保育の課題は遊びの技能と遊びのなかのコミュニケーションを育てること。楽しいこと・できることを積み重ねることで、自己肯定感を育て、情緒のコントロール力を少しずつつけていくこと。指導員が子どもの行動を「悪いことをしたときだけ注目する」のではなく、B君のなかの心と行動の文脈から見て、よいことを見つけ、肯定的な注目を与えるようにし、B君の心の葛藤を感じ取ってことばにしていくこと。それは、ことばによる自己コントロールを他者が引き取って支えていく、ということです。保育体制を工夫しB君に対する対応のしかたに共通理解を図ること。周囲の評価を変えていくように、できることを皆で認められるような活動や役割を設定すること、などです。

(4) 問題行動は「対応を変えて・もっと変わりたい」というメッセージ

軽度発達障害の子どもには、パニックや乱暴な言動、集団のルールが守れないなどの「問題行動」が付きものです。しかし問題行動は、大人の側の対応への警鐘であり、子どもの次の発達への要求です。

エピソード5；他児へのちょっかいを嫌がられても止めない

高機能自閉症の2年生のC君は、1年生の頃は、児童クラブでは大好きな電車やゲームのキャラクターなどの絵を描いたり、マンガを読んだりして過ごしていた。2年生に入った頃から、誰というでもなく理由もなく、いきなり、そばの子どもや、児童館内の幼児を後ろからぼんと押し倒すことが増えてきた。あるいは、他児たちに対し、たたく、呼び捨てる、悪口を言う、スカートをめくる、抱きしめるなどのちょっかいを出すので嫌がられ、追いかけられ、その都度相手が向かってきてお返しをされては、怖くなって「キャー」と奇声を上げては逃げる。また近づいては「ごめんない、バカ、こっちに来るな」などと言っては同じことを繰り返していた。クラブでは、その都度めんめんとことばで説得し注意をしていたが、一向に変わる気配がない。



「問題行動」には必ず理由があります。「問題行動」は表面的に消去するのではなく、その裏側にある子どもの願いをくみとる取り組みにつなぎたいものです。

C君の「問題行動」は、自閉症児に特有の「挑発行動」「接近回避の対人関係」とも言われるものですが、クラブという集団生活を送るなかで他者に気づき、集団に気づいてきたことの表れです。人を求め関わってほしい気持ち、遊びたい気持ち、集団に入りたい気持ち、でも不安もいっぱい、という状態なのです。「問題」ではなく、C君の次の発達の芽生えであり、援助を求めているサインです。